Osaka Shoin Women's University Repository

『太平記』（日本古典文学大系）年表索引稿（四）

巻33～巻40

谷垣伊太雄

巻	頁	年	月日	記事
33				
	240	（文和4年）	昨日	「昨日」神南合戦に敗れた山名師氏は本陣へ引き返す（史実としては、2月6日。巻32・二二九頁注）。
	240		（2月7日）	山名の敗走を聞き、将軍足利尊氏は比叡山を下り東山に布陣（西坂本に下り2月9日頃鷲林寺に布陣）。
	240		（同日？）	仁木頼章は、丹後・丹波の勢を従えて嵐山に布陣。淀・鳥羽方面は宮方、東山・西山等は将軍方の陣。
	240		（？）	「東山ヨリ寄テ日々夜夜ニ」焼払う。「東寺（直冬）ヨリ寄テ」焼払う。
	240		2月8日	細川清氏、千余騎で四条大宮へ押し寄セ「追ツ返ツ終日ニ戰ヒ暮シテ、左右へ颯ト引退」く。
	241		（同日）	「日已ニ夕陽ニ成ヌレバ分明ニ見分クル人モ」ないが「桃井播磨守直常ニテ候ゾ」と名乗る武士を、細川清氏は引き返して討つ。
	241		昨日	「昨日」降人となった八田左衛門に、清氏が討った首を確認させると、二宮兵庫助の頸だと判明。
	242		去月	（八田の言葉）「去月」二宮は敦賀の気比大明神の前で、桃井と名乗って京都の合戦に加わると誓った。
	242		2月15日	朝、東山勢の進攻を聞き、桃井・斯波勢出兵。これを見て細川清氏らも出兵し、合戦となる。

Osaka Shoin Women's University Repository

243		同日	「晩景ニ」仁木・土岐勢三千余騎、七条河原付近で、桃井・赤松勢二千余騎と激しく合戦。
244		其日	赤松氏範の奮戦によって、土岐の桔梗一揆も引き退き「其日ノ軍ハ留リケリ」
244		3月13日	仁木・細川・土岐・佐々木ら七千余騎、七条西洞院に出撃。二手となって尾張高経らの勢と合戦。
245		(同日)	尾張勢の那須五郎、奮戦して討死。激しい合戦が展開。
246		3月13日	管領仁木頼章は嵐山から動かず。夜、足利直冬ら京都を退き、八幡・住吉・天王寺・堺の浦へ赴く。
247		(?)	直冬勢五万余騎となる。合戦再開の前に八幡に祈願したが否定的神託だったため、軍勢も四散。
247		(14日)	「東寺落テ翌ノ日」東寺の門に、石堂・山名・桃井批判の落首が掲げられた。
248	去々年		「持明院ノ本院・新院・主上・春宮ハ皆去々年ノ春」賀名生に幽閉(六年前の文和元年のこと)。
248	延文2年	2月	光厳院ら賀名生より京都へ還幸。
248	去観応3年	8月8日	光厳院は、賀名生行宮にて出家。
248	(同年)		帰洛後の光厳院・光明院は夢窓国師の弟子となり、小倉の庵・大光明寺に閑居。
253	延文3年	2月12日	公家の窮困、武家の富貴百倍の中にあって、故足利直義に対し、従二位が贈られた。
254	同年	4月20日	尊氏の背中に癰瘡ができ、医師が参集(30日が正しい)。
254		同29日	尊氏は「寅刻、春秋五十四歳ニテ遂ニ逝去」(30日が正しい、巻34・二七六頁の注は28日)。
254		(?)	「中一日有テ、衣笠山ノ麓等持院ニ葬シ奉ル」
254		(?)	「五旬」過ぎて、故尊氏に従一位左大臣の官が贈られた(6月3日)。
255	(延文4年)		義詮の哀悼歌は叡感を蒙り、後光厳天皇が「新千載集ヲ被撰ケルニ」入集する。
255		同4月18日	新待賢門女院崩御(4月29日が正しい)。
255	同年	5月2日	梶井二品親王(尊嵐)入滅。
255	今年		「今年ハ如何ナル歳ナレバ、高キ歎ノ花散テ、陰ノ草葉ニ懸ルラント、僧俗男女共ニ」歎き悲しむ。

Osaka Shoin Women's University Repository

256	今年	九州探題一色直氏・舎弟範光、菊池武光に負けて京都へ上り、九州は概ね南朝方となる。
256	(?)	九州鎮圧のため、細川繁氏を伊予守として九州へ派遣。
256	延文4年 6月2日	細川繁氏、讃岐国で「俄ニ病付テ物狂ニ」なる（崇徳院の神罰）。
256	(?)	「病付テ七日ニ當リケル卯ノ刻ニ」どこからともなく千余騎の兵が押し寄せる。
257	(?)	変化の兵に討たれた者たちは無事だったが、伊予守とその家人行吉掃部助は急死する。
257	11月17日	菊池武光は五千余騎で肥後国から日向国に向かう。
258	11月10日	菊池武光は「十一月十日ヨリ矢合シテ」畠山の「三保ノ城ヲ夜晝十七日ガ中ニ」攻めおとす。
259	7月	新田・菊池の勢が太宰府へ攻め寄せると聞き、小弐頼尚ら六万余騎、味坂庄に陣取る。
260	7月19日	菊池は五千余騎で筑後河を渡り、小弐の陣へ出撃。小弐は三十余町退いて対陣。
260	去年	太宰小弐が「去年」助けてもらった時に菊池にさしだした起請文を、菊池は旗竿に付けて対陣する。
260	8月16日	「夜半許ニ」菊池は精鋭の兵三百余騎を搦手へ回わす。夜討によって小弐側を同士討ちさせる。
261	(17日)	「夜已ニ明ケレバ」菊池勢、千余騎で駆け入り、小弐頼尚の嫡子を討つ。
263	今日	「今日ノ卯剋ヨリ酉ノ下マテ」両軍合戦、約四千を討たれた小弐は太宰府へ退去。菊池も肥後国へ退去。
264	(?)	「此三四年ガ間」新田義興・義宗・義治は越後国に城郭を構えていた（文和元～4年頃か）。
264	(?)	武蔵・上野からの誘いによって、新田義興のみ越後より東国に移り勢威を張る。
264	或夜	畠山道誓、竹沢右京亮を呼び、偽って義興に降り義興を討つよう命じる。
265	先年	竹沢に対する道誓の言葉「御邊ハ先年武藏野ノ合戰ノ時、彼ノ義興手ノニ屬シテ忠アリシ」
265	翌日	「翌日ヨリ」「晝夜十餘日マデ」竹沢は傾城・傍輩を呼んで遊宴し、畠山より退去を命じられる。
265	(?)	「數日有テ」竹沢は、義興の所へ出頭して畠山を非難し、義興への奉公を願い出る。
265	元弘	竹沢の言葉「元弘ノ鎌倉合戰ニ忠ヲ抽デ候キ」

Osaka Shoin Women's University Repository

265	先年		竹沢の言葉「先年武蔵野ノ御合戦ノ時、御方ニ参テ忠戦致シ候シ」
267		(?)	竹沢は義興に偽って奉公し「半年許ニ成ニケレバ」義興からも信頼を受けていた。
267		9月	「九月十三夜」「今夜明月ノ會ニ事ヲ寄テ」義興を討つ事を竹沢は謀る。
267		今夜	竹沢は義興を「今夜ハ明月ノ夜ニテ候ヘバ」と、自邸に招待する。
267		今夜	義興に仕える女性の夢を占った井弾正の言葉「今夜御遊ヲバ可レ被レ止」。義興もそれに従う。
268		今夜	竹沢は「今夜ノ企」が予定通り運ばなかったことを危惧する。
268		(翌日)	竹沢は「翌ノ夜」、義興に夢を語った女性（少将の局）を殺害する。
268		(?)	自分の力に限界を感じた竹沢は、畠山道誓に詳しく報告する。
269		10月10日	「曉ニ」竹沢・江戸遠江守に欺かれた新田義興は、鎌倉へ急行する。
269		(前夜)	矢口の渡で「宵ヨリ」江戸遠江守・同下野守三百余騎が待ち伏せる。
270		(10日)	竹沢に欺かれた新田義興は「七生マデ汝等ガ爲ニ恨ヲ可レ報者ヲ」と怒って自尽する。
271		正平7年	死んだ新田義興は「正平七年ノ武蔵野ノ合戦、鎌倉ノ軍ニモ大敵ヲ破」った。
272		10月23日	「暮程ニ」恩賞の地へ下る江戸遠江守、矢口の渡で義興の怨霊に襲われる。
273		(?)	怨霊に遭った江戸は「七日ガ間足手ヲアガキ」「叫ビ死」する。
273		(?)	「其翌ノ夜」畠山国清、怨霊となった義興の夢をみる。
274		(?)	義興の怨霊を鎮めるために、新田大明神が祀られる。
34			
276	去年		「去年マデ筑紫九國ヲ打順ヘタリシ」菊池武光も勢力減退し、宮方は悲歎（史実では延文4年に大勝）。
276	延文3年	12月18日	宰相中将足利義詮、征夷将軍となる（他記録は「12月8日、征夷大将軍」）。
277	元弘		「去元弘ノ始、相模入道ガ振舞悪逆無道ニシテ武運已ニ傾ベキ時至ヌトヤ見タリケン」
277	文和2年	6月	「去文和二年六月ニ山名伊豆守ガ謀叛ニ依テ、主上帝都ヲ去セ御座シテ、越路ノ雲ニ迷セ給フ」

Osaka Shoin Women's University Repository

314		
	(?)	「其比」五条や六角堂に、畠山らを諷刺する落首が書き付けられた。
315	8月4日	夜、畠山国清ら、ひそかに京都から遁走。しかし、途中で義長方の勢に阻止される。
316	(?)	「其比」日野僧正頼意、吉野の山中を出て、北野神社に通夜して、遁世者・雲客・法師の物語を聴く。
317	元弘	雲客の言葉「元弘ヨリ以來、天下大ニ亂テ三十餘年、一日モ未靜ル事ヲ不ㇾ得」
335	(?)	頼意が物語を聴いた三人は「晨朝ニモ成ケレバ、夜モ已ニ朱ノ瑞籬ヲ出テ」各々帰って行った。
336	(?)	仁木義長に同心する小河・土岐はたてこもる尾張小河の城を土岐宮内少輔に「廿日餘り」攻められ降参。
336	9月28日	石塔頼房と近江に進出し佐々木頼も対峙していた仁木三郎は、「數日を經」た「早旦」、出撃。
337	(同日)	佐々木氏頼「今日打負ナバ弓矢ノ名ヲ可ㇾ失トテ、僅ノ勢ヲ數タニ成テハ叶マジ」と、少勢で対陣。
338	11月1日	佐々木に討たれた者の首は「同十一月一日」に都に送られ、六条河原に懸けられた(10月とする本あり)。
338	(?)	仁木三郎は降参し、義長は伊勢に拠る。佐々木・土岐は対陣したものの「二年ハ、徒ニノミゾ過シケル」
36		
342	去年	「都ニハ去年ノ天災・旱魃・飢饉・疫癘」がおこり、死骸が充満(延文5年のこと)。
342	延文6年 3月晦日	疫病流行などのため、「康安」と改元(3月29日)。
342	(康安元年) (同日)	「其夜四條富小路ヨリ火出テ、四方八十六町マデ燒失ス」。不吉として改元への不安の声あり。
343	(?)	「三年ガ間大敵ニ取巻レテ、伊勢ノ長野ノ城」にいた仁木義長は、勢力も減少し、南朝に降る。
346	同年 6月18日	「同年ノ六月十八日ノ巳刻ヨリ同十月ニ至ルマデ、大地ヲビタヽ敷動テ、日々夜々ニ止時ナシ」
346	6月22日	「同六月二十二日、俄ニ天掻曇雪降テ、氷寒ノ甚キ事冬至ノ前後ノ如シ」。凍死者も出た。
346	7月24日	摂津国難波の浦の沖が乾あがったのち津波おし寄せ、数百人の海人、水死する。阿波鳴門でも異変あり。
347	8月24日	大地震あり、難波浦の沖より大龍が出現し、天王寺の金堂崩壊する(6月の誤りであろう)。
348	(?)	般若寺の円海上人が天王寺の金堂を再建したが「希代ノ奇特共多カリケリ」
349	8月13日	異変が頻発するため、青蓮院尊道法親王に命じ、この日より内裏で、大熾盛光の法が行なわれた。

Osaka Shoin Women's University Repository

278	延文4年	10月8日	畠山国清、足利基氏の許しを得て、宮方討伐のため、武蔵入間河を出立して上洛。
279		11月28日	畠山の「京著ハ十一月廿八日ノ午刻ト聞ヘシカバ」、華美な行粧を見るために見物衆が群をなす。
279		(?)	「此比」河内天野にいた後村上天皇に、楠木正儀らは、皇山上洛の情勢を考え観心寺への遷幸を奏聞。
280	元弘・建武		楠木らの言葉「元弘ノ千盤屋ノ軍ハ中々不レ及二申ニ一。其後建武ノ亂ヨリ以來」攻めた敵に利はなかった。
281	(延文4年)	(12月23日)	後村上天皇、観心寺に遷幸(二八〇頁の頭注一三)。
282	延文4年	12月23日	足利義詮、七万余騎の勢で都を出立、大手として南方へ向かう。
282		翌日	畠山国清は搦手として、二十万騎を率いて「翌日ノ辰刻ニ都ヲ」出立。
283		同日	大手・搦手三十万騎は、天王寺・阿倍野・住吉の遠里小野に陣を取る。義詮は尼崎に陣取る。
283		(?)	和田・楠は赤坂城に、その他の勢は平石城・八尾城等にたてこもる(翌年一月頃か—私注)。
284	(延文5年)	2月13日	「同二月十三日」寄手の先陣二十万騎、金剛山の北西津々山に陣取る。
284	先年		寄手の狼藉ぶりは「先年」高師泰が石川川原に陣取って狼藉を働いたのに「百倍セリ」
285		4月3日	畠山義深らの三万余騎、四条隆俊らの陣取る紀伊国最初峯に「同四月三日」向かい、和佐山に陣取る。
287		(?)	宮方の侍大将塩谷伊勢守は、龍門山で畠山勢を迎撃したが、討死する(5日か—私注)。
288		4月11日	「同四月十一日」畠山義深を援護のため、畠山義煕ら七千余騎、紀伊路へ発向。
289		(?)	四条隆俊、龍門山の合戦に負けて阿瀬河へ落ちる。
289		今月12日	住吉の神主津守国久「今月十二日ノ午剋ニ、當社神殿鳴動」等の怪異を勘文として密奏する。
292	正平7年		「去ル正平七年」赤松則祐が「吉野ノ將軍ノ宮」を戴いて南朝側に立った(他書によると、6年)。
293	(延文5年)	4月25日	「吉野ノ將軍ノ宮」(護良親王の御子)、義詮と連絡をとって謀叛、賀名生の奥の銀嵩で挙兵。
293		(26日)	「宮ノ御謀叛」鎮圧のため「其翌日」二条師基ら千余騎を派遣。
293		(?)	「三日三夜」戦って、宮は南都へ敗走。

Osaka Shoin Women's University Repository

296		和田・楠木が龍泉城に大軍がたてこもっているように見せかけたため、足利勢「百五十餘日」攻め得ず。
297	閏4月29日	城側の偽りを知り、土岐桔梗一揆は「閏四月廿九日ノ暁」城を攻める。城陥落する。
298	同日	今河・佐々木ら五百余騎、「同日ノ晩景ニ」平石城を攻める。
298	其日	「其日ノ夜半許ニ」平石城陥落し人々は金剛山へと落ちる。
299	5月3日	足利勢二十万騎、「五月三日ノ早旦ニ」赤坂城へ攻め寄せる。
299	5月8日	和田正武、「五月八日ノ夜」夜襲をかけるが、功を奏せず。
301	其夜	和田・楠木「其夜ノ夜半許ニ」赤坂城に火を放ち、金剛山の奥へ入る。
302	元徳3年 5月29日	「去ル元徳三年五月廿九日」資朝は佐渡で斬られた（上北面がみた夢）。
304	(延文5年) 5月28日	「同五月廿八日」足利義詮帰洛。
306	(?)	「其比」、畠川国清、細川清氏らに仁木義長討伐を謀り、同意を得る。
307	建武	仁木が「建武ノ合戦」の時、佐々木氏頼の土地を恩賞としてもらったことがあった。
308	(?)	畠山・細河・土岐・佐々木らは仁木を討つ事を謀議し、「其日ハ酒宴ニテ止ニケリ」
308	(?)	畠山らは「南方ノ蜂起ヲ鎮ン爲」、実は仁木義長を討つために、天王寺に赴く。
310	(?)	仁木義長は畠山らの真意を義詮に告げ、執事となって天下の権を掌握。
310	7月16日	天王寺の勢は山崎で二手に分かれ、細川らは西の七条口より、畠山らは東寺口より進攻と決定。
310	今年	「今年南方既ニ靜謐シテ」「世中心安ク成ヌト悦合ヘル」京中の貴賤は、合戦を懸念しあわて騒ぐ。
311	(?)	佐々木高氏、ひそかに義詮に翻意を勧める。義詮は仁木を見限って、夜、西山の谷堂へ脱出。
312	(?)	義詮の脱出がわかり、「今朝」まで七千余騎だった仁木義長の勢は、三百余騎となる。
313	(?)	義長は京都から伊勢国へ落ちる。義詮、帰洛（帰洛は、他記録によれば、7月19日―私注）。
313	(?)	京都の同士軍によって、大和・和泉・紀伊などの南朝方蜂起する。

Osaka Shoin Women's University Repository

349		9月8日	聖護院覚誉親王は、七日間、尊星王の法を修す。又、近年絶えていた最勝講も行なわれた。
350		7月12日	山名時氏ら、出雲・伯耆・因幡の勢三千余騎を率して美作へ発向、次々に各地の城を征服する。
351		9月10日	山名を防ぐため、赤松一族の要請で四国にいた細川頼旨（頼之が正しい）備前に渡り、倉懸城を援護。
352		11月4日	美作倉懸城陥落。山名の勢力増大する。
352		7月	「去ヌル七月初」筑紫では、懐良親王・新田・菊池勢が香椎に陣取ると聞き、大友・少弐らの勢出撃。
353		8月6日	菊池の家の子城越前守は、あらかじめ敵陣に撹乱の噂を流し、「八月六日ノ暁」飯守山の松浦党を攻略。
353		7日	「明ル七日午刻」宮・菊池の五千余騎出撃、昨日の松浦党敗北を聞いていた小弐・大友勢も敗退。
353	同年	9月28日	赤松氏範と佐々木道誉の紛糾を聞き、和田・楠木摂津国に進撃し、防戦した佐々木秀詮兄弟は討死。
354	去年		足利義詮が南方を攻めた際、赤松光範のことを聞いた佐々木道誉は、光範から摂津守護職を横奪。
356		(?)	「京都ニ希代ノ事有テ」細川清氏ら「都ヲ落テ、武家ノ怨敵ト成ニケリ」
357	建武		加賀国守護職は「建武ノ始」以来、富樫介が引継いできたのを、その死後、道誉が斯波に与えんとした。それに反対して、富樫介の子を擁立した細川清氏と、佐々木道誉とが対立。
358		(?)	鎌倉より上った志一上人、「細河相摸殿ヨリコソ、此一両日ガ先ニ一大事ノ祈願候」と道誉に語る。
359		(?)	志一上人が細川清氏から預かっていた願書を道誉は借り受け「明日是ヘ御渡候ヘ」と言って退出。
359		(?)	「其翌日」道誉は、願書を伊勢貞継に見せ、清氏が将軍を呪詛していることを語る。
359	康安元年	9月3日	細川清氏の願書の日付。内容は、義詮・基氏を呪詛したもの。
360		(?)	伊勢入道が謀略を懸念してしまっておいた願書を、道誉は義詮に披露。義詮は清氏の呪詛を信じる。
360		(?)	道誉が湯治のために有馬に行く。「其後四五日有テ」天龍寺へ行った清氏は「物具シタル兵」を引率。
361		9月21日	将軍義詮は「九月廿一日ノ夜半許ニ、今熊野ニ引籠リ」清氏を警戒。
362		23日	細川清氏「洛中ニテ兵ヲ集メ、戰ヲ致サント用意シタルモ、且ハ狼藉也」と考え、若狭へ落ちて行く。

Osaka Shoin Women's University Repository

363		24日	将軍義詮は今熊野より帰館。
364		10月29日	斯波氏頼、義詮の命により清氏を討つため椿峠へ向かう。
365		(?)	斯波を迎撃しようとした清氏は城に残し頓宮の心替りに合い、天王寺へ落ちる。
366		(?)	清氏は石塔頼房を通じて南朝に降参を請い、恩免の綸旨下る。
366		(?)	仁木頼夏ら、諸国で兵を集め、清氏に応ずる。
366	康安元年	11月13日	畿内の蜂起に動じなかった義詮のもとに、関東より飛脚到来、畠山国清らが敵となった事を知る。
366	去々年	冬	畠山が叛旗を翻した理由は、「去々年ノ冬」南方退治の大将として上洛した時の内部確執にある。
367	去々年		畠山に反発する者達の訴えを聞いた基氏は、「去々年上洛ノ時」の畠山を批判し、退去を命じる。
367		(?)	「其比鎌倉ニ有ケル」畠山は、弁解不能と考え、伊豆国へ落ちる。
367		(?)	畠山の勢が「小田原ノ宿ニ著タリケル夜」、土肥掃部助、攻め寄せ火を放つ。
367		(?)	畠山国清は「其夜小田原ノ宿ヲ落テ、伊豆ノ修禅寺ニ楯籠ル」
368		(?)	弟の畠山義深は、信濃に拠る。
370	(康安元年)	正月	細川清氏、石塔頼房を奏者として、京都攻略および「臨幸ヲ正月以前ニ成進セ候ベシ」と上奏(康安元年)。
370	(建武3年)	正月16日	後村上天皇より清氏の案をたずねられた楠木正儀の言葉「故尊氏卿、正月十六日ノ合戦ニ打負テ、筑紫ヘ落テ候ショリ以來、朝敵都ヲ落ル事已ニ五箇度ニ及候」として消極案をのべる(建武3年の合戦)。
371	明年		「明年ヨリハ三年北塞リナリ、節分以前ニ洛中ノ朝敵ヲ責落シテ、臨幸ヲ成奉ルベキ由」に決定。
371	(正年16年)	12月3日	南朝勢二千余騎、住吉・天王寺に勢揃え。
372		2日	宰相中将義詮、東寺に陣取って著到をつけると、四千余騎となった。佐々木高秀らを各方面へ派遣。
372		同7日	南朝勢、淀川を越えて軍評定。細川清氏の意見が採用されて、都へ進攻。

Osaka Shoin Women's University Repository

373		同8日	佐々木らが南朝勢を簡単に通したため、義詮は後光厳天皇を警固して「暁ニ」近江武佐寺へ落ちる。
373	去々年	春	「去々年ノ春ハ清氏武家ノ執事トシテ相公ヲ扶持シ奉リ」（延文4年のこと。本文中に具体的記事なし）。
373	今年	冬	「今年ノ冬ハ清氏忽ニ敵ト成テ相公ヲ傾ケ奉ル」
373		同日	「同日の晩景ニ南方ノ官軍都ニ打入テ、將軍ノ御屋形ヲ焼拂フ」
374	元弘		宮方では「元弘ノ如ク天下ノ武士皆コボレ落テ、付順ヒ進センズラン」と思ったが、参集する武士なし。
375		12月24日	佐々木・今川・宇都宮の勢一万余騎、武佐寺を出発。
375		同26日	佐々木らの勢の先陣が瀬田に到着。
376		同26日	「同廿六日ノ晩景程ニ、南方ノ宮方宇治ヲ經テ、天王寺・住吉ヘ落」ちる。
376		同29日	義詮、宮方に代わって再び京都に入る。
376	康安元年	12月27日	義詮、近江武佐寺の後光厳天皇に「急ギ還幸ナルベキ由」の早馬の使者を派遣。
376		（28日）	「其翌ノ朝」後光厳天皇は東坂本へ行幸、「此ニテ御越年アリ」
376	去年	12月8日	後光厳天皇の都落ちの日付。それ以後の里内裏の荒廃を考え、修理後に還幸とのこと（康安元年）。
376	翌年	春	後光厳天皇は「翌年ノ春の暮月ニ至マデ、猶坂本ニゾ御坐アリケル」
377		3月13日	里内裏の修理は捗らず。しかし、いつまでも外都に居るわけにもいかず、西園寺の旧宅へ還幸。
377	今年	春	後光厳天皇は西園寺邸にて「今年ノ春ヲ送ラセ給」
377		4月19日	諸寮の修理ができたので、本の里内裏に還幸（他記録によれば、21日に土御門殿に還幸）。
377	去年	冬	南朝から大将の任を授けられた細川清氏は「去年ノ冬」義詮を都から追落した時にも馳せ付ける勢なし。
378		正月14日	細川清氏、兵共が馳せ付ける事を期待して、阿波国へ渡る（他記録では、正平17年1月13日―私注）。
380		（?）	義詮は斯波氏頼を執事にしようとしたが、父の斯波高経が反対。氏頼は出家する。
385		3月27日	足利基氏は平一揆に伊豆の畠山国清らを攻めさせたが、畠山の手勢が「三月廿七日ノ夜半ニ」逆寄せ

Osaka Shoin Women's University Repository

386		(?)	畠山の勢威衰微して修禅寺の城へ引きこもる。
398	康安2年	2月	都に彗星・客星同時に出現。天文博士たち「尤天下ノ御慎ニテ候ベシ」と勘申。
398	去年	7月	「去年ノ七月ヨリ日々ニ二三度ノ地震モ未ゝ休」
398	今年	6月	「今年ノ六月ヨリ十一月ノ始マデ旱魃シテ、五穀モ不ゝ登」餓死者も出る。
399		(?)	「此時近江ノ湖モ三丈六尺干タリケルニ、様々ノ不思議アリ」
399	同年	6月3日	山名時氏五千余騎で伯耆より美作院庄へ進出し、諸国へ勢を発向させる。
399		(?)	備前・備中へは山名師義が二千余騎で発向。
401		(?)	備前へは富田直貞が八百余騎で進攻、宮下野入道を討とうとしたが、足利直冬敗走し、富田も引き返す。
402		(?)	但馬へは山名・小林ら二千余騎が発向、しかし赤松や仁木らの抵抗に合い、小林は伯耆に戻る。
403		(?)	越中へは桃井直常が信濃より進攻し、加賀へも進出しようとしたが敗北し、井口城に逃げこもる。
405		(?)	斯波氏経、九州探題として下向。傾城を乗船させていた事が凶兆と思われた。
407		9月23日	探題斯波氏経を攻めるため、菊池らの勢五千余騎、豊後国へ発向。斯波勢七千余騎、筑前で待つ。
407		同27日	菊池武義（武光の弟）、五千余騎を二手に分けて、斯波勢のいる筑前国長者原へおしよせる。
407		(同日)	「其日」の大将菊地武義負傷し、宮方の軍勢は二十余町引き退く。
408		(?)	探題・小弐・大友勢は二度目の合戦に負けて、ちりぢりとなる。
408	今年		菊池武光の勢、探題らのたてこもる高崎・岡・宗像の三域を「今年ハ巳ニ三年マデ、遠攻ニ」する。
408	去年		「去年ヨリ」修禅寺にたてこもっていた畠山国清ら、兵粮尽きて苦戦（籠城は康安2年2月）。
409		9月10日	畠山国清・義深、足利基氏に降参。
409		9月18日	夜、稲生平次、国清に明日討手が来るので今夜逃げよ、とひそかに連絡。

Osaka Shoin Women's University Repository

409		(同日)	「其夜」畠山ら藤沢の道場まで落ちる。
409		(翌日)	「翌ノ夜」箱根の畠山義深のもとに、時衆が国清らの事を報告。義深「夜ニ紛テ」藤沢の道場へ。
410		(?)	京都の七条道場に「夜半許ニ」着いた畠山兄弟を「聖二三日勞リ奉テ」「南方ヘゾ被ゝ送ケル」
411		(?)	讃岐で細川頼之と数か月戦っていた細川清氏、敗死する(貞治元年7月24日)。
413		7月23日	朝、細川右馬頭頼之、新開真行に作戦を語る。細川清氏との合戦。
414		(23日)	新開は方々に火を放ち、「夜已ニ深ケレバ」清氏の城の前白峯の麓へ押し寄せる。
414		同24日	「辰刻ニ」作戦通リ、細川頼之は搦手にまわり、二手に分かれて時の声をあげる。
416	暦応2年	秋	「片皮破ノ猪武者」清氏が伊賀高光に討たれたのは、元暦の義仲、暦応の義貞に似ていた(元年が正)。
416		24日	西長尾の城に向かった清氏の弟頼和は、「夜明テ後」新開の作戦に気付く。
417		(?)	細川頼和ら和泉国に逃がれ、四国はことごとく細川頼之に従った。
417		7月24日	清氏と同時に合戦を始める予定だった和田・楠は、24日の清氏の討死を聞き、摂津へ進攻。
418		8月16日	「夜半許ニ」篝火を多く焼いて元の陣にいるように見せた和田・楠は、三国の渡を渡って敵を撹乱。
420		9月16日	石塔・和田・楠の三千余騎、赤松光範が支配する兵庫湊川を攻め、焼き払い引き返す。
420	(康安2年)	9日晦日	「都ニハ同九月晦日改元有テ貞治ト號ス」(9月23日が正しい)。
420		(?)	和田・楠は河内国へ帰り、山名時氏も因幡国へ引き返す。
420	今年		「今年天下已ニ同時ニ亂テ、宮方眉ヲ開キヌト見ヘケルガ、無ゝ程國々靜リケル」は、清氏の討死による。
431	貞治3年	春	多年宮方だった大内弘世、心変わりして、長門・周防両国を所望して、義詮方となる。
431		(?)	長門国守護職を追われた厚東は筑紫へ渡り菊池と合流。これを討とうとした大内は負け、やがて上京。
432		(?)	山名時氏・師氏父子、義詮に降を乞う。義詮はこれを宥し、因幡など五か国の守護職に任ず。
433		(?)	伊勢の仁木義長も「五六年ヲ經テ後」降参を義詮に乞う。義詮、義長を京都に召したが領国は与えず。

Osaka Shoin Women's University Repository

433	貞治		「近年ハ、敵ニ成タリツル人々ハ皆降参シテ、貞治改元ノ後洛中西國靜也」しかし東国で同士軍あり。
433	(観応2年)		「此三四年ガ先」尊氏と直義とが合戦した時、上杉憲顕は直義方として敗れ信濃へ逃げ下り、「宮方ニ成テ猶此所存ヲ遂バヤト、時ヲ待テゾ居タリケル」(観応2年から貞治2年までは「十餘年」)。
434		(?)	上杉と旧好のあった足利基氏、上杉に越後守護職を与える。その職にあった芳賀禅可、上杉と戦い敗北。
434		6月17日	基氏と戦わんとして、禅可は嫡子らを武蔵国へ派遣、その勢、辰刻に苦林野に到着(8月20日すぎか)。
439		今日	芳賀勢「昨日ハ二日路ヲ一夜ニ打チ」「今日ハ又入替ル勢モ無テ終日戦ヒ」「今ハ是マデトヤ思ケン、日已ニ夕陽ニ成ケレバ」宇都宮へ帰る(8月26日に戦ったらしい。四三四頁頭注九)。
439		翌日	足利基氏、鎌倉へ帰る。基氏の勢威、いよいよ増大。
440		(?)	義詮方となった斯波高経の専横ぶり、興福寺領を押領したため、僧徒春日の神木を奉じて強訴に及ぶ。
441		5月17日	変異頻発。大鹿二頭、都に現れ、長講堂の南門前で四声鳴いて姿消す。
441		同 21日	「月額ノ迹有テ、目モ鼻モ無テ、髪長々ト生タル、ナマシキ入道頸一ツ、七條東洞院」に出現。
441		同 28日	長講堂の大庭で独楽回わししていた童、物狂いとなり三日三夜跳り、神託を告げる。
442	(貞治5年)		春日社の神木は「三年マデ閣レ」た(神木の帰座は貞治5年8月12日、貞治3年12月から二年九か月)。
442	(貞治3年)	10月3日	「神訴ヲ得、呪咀ヲ負ケルモ、只其身ノ不祥ト」思われたが、道朝(高経)邸の焼失も春日の祟りとの噂。
442	(貞治4年)	(4月26日)	「サレドモ道朝ヤガテ三條高倉ニ屋形ヲ立テ」人々が群集したが「行末如何ガ有ンズラン」とも思われた。
443	(貞治3年)		将軍義詮が三条坊門万里小路に新邸造営開始(8月11日)、赤松則祐は分担の期日遅れ、高経を恨む。
443	貞治5年	3月4日	「道朝種々ノ酒肴ヲ用意シテ」この日に「將軍ノ御所ニテ、花下ノ遊宴アルベシト被レ催」
443		(4日)	五条橋架設の事で面目を失い道朝に反発を覚えていた道誉は、「其日」別の大原野で華美な遊宴をする。
445	貞治4年	8月4日	「晩景ニ」道朝は義詮に、道誉らの不穏な動きと、わが身の忠正を訴える(貞治5年が正しい)。

Osaka Shoin Women's University Repository

445		(3日)	道朝の言葉、「昨日」江州の佐々木氏頼らが合戦の用意をして上京する由。慰撫された道朝は北国下向。
446		8月8日	「夜半許ニ」二宮勢に、氏頼の警固する将軍家を襲撃させるふりをして、道朝は越前へ落ちる。
447	同	年	10月	越前杣山城に拠る道朝らを、義詮は七千余騎で「十月ヨリ」攻撃させたが、城は陥落せず。
448	翌	年	7月	道朝（斯波高経）急病により死去（貞治6年）。
448			9月	道朝の子息義将の嘆願により「同九月ニ宥免安堵ノ御教書ヲ被成、京都へ被召返ニ」
448	(貞治5年)		8月12日	「神木御歸坐」道朝が都を落ち河口庄を興福寺に返したため、帰座の刻限は卯時と決定。
448			(12日)	「其曉ヨリ」風雨が激しかったが「其期ニ臨デ雨晴風定リテ」快晴となる。
448			(12日)	「午刻許ニ」鷹司左大臣冬通ら参向。
450	貞治5年		9月23日	高麗国の使者、出雲に着く（使者の出発年月「至正23年〈貞治2年〉8月13日」は信用できぬ）。
458	正平7年			「光厳院禅定法皇ハ、正平七年ノ比」賀名生より都へ還御（延文2年＝正平12年が正しい）。
459			(?)	光厳法皇、僧一人を伴い行脚に出発。
460			(?)	光厳法皇、紀伊川の柴橋で出会った武士に水中へ押し落される。
461			(?)	光厳法皇、高野山に参詣。泣く桑門に出会ったが、それは紀伊川での武士二人であった。
462			(?)	光厳法皇、高野山からの下向の途次、吉野殿で後村上天皇と対面。
463	元	弘		光厳法皇の回想談「元弘ノ始ニハ江州ノ番馬マデ落下リ」
463	正	平		光厳法皇の回想談「正平ノ季ニハ當山ノ幽閑ニ逢テ兩年過ルマデ」幽閉。（帰洛までは約六年が正しい）。
464			(?)	帰洛後の光厳法皇は、丹波国山国へ。
464	翌	年	夏	光厳法皇「翌年ノ夏比ヨリ、俄ニ御不豫ノ事有テ」（他記録によれば、六月上旬）。
464	(貞治3年)		7月7日	光厳法皇崩御。
465			(?)	光厳法皇を山国常照寺の「後ノ山ニ葬シ奉ル」。

Osaka Shoin Women's University Repository

465	当　年	（7日）
465	（貞治5年）	（7月7日）
468	貞治6年	3月18日
468		（？）
469	元徳2年	2月
469	建武2年	正月
469	今　年	春
469	建　武	
469	（貞治6年）	3月29日
470		（29日）
470		（29日）
473		（30日）
474		翌日
474	（貞治5年）	3月28日
474		29日
475	（貞治6年）	翌日
475	今　年	春
475	貞治6年	4月26日
476		6月18日

「往昔ノ七夕ニハ」乞巧奠、「當年ノ今日ハ」「御葬送」（他記録によれば、葬礼は8日か―私注）。

「第三廻ニ當リケル時ハ」後光厳天皇、宸筆法華経にて八講（三回忌は貞治5年7月7日、ただし、宸筆法華経による八講は、七回忌の応安3年7月3日から7日まで）。

後光厳天皇、長講堂へ行幸。後白河法皇の遠忌のため「三日マデ御逗留」（史実としては、13日）。

中殿御会について勅諚あり。

中殿御会の先例のうち「後醍醐院御宇」のもの（元徳2年2月23日）。

「清涼殿ニシテ和哥ノ宴」（建武2年正月13日。同12日は御会始）。

「今年ノ春ハ九城ノ裏ノ花香ク、八島ノ外ニ風治レル時至レリ」（貞治6年）。

「建武ノ宸宴」で尊氏が和歌を詠んだ先例あり（建武2年正月の御会）。

中殿御会の日。

「既ニ其日ニ成シカバ、母屋ノ廂ノ御簾ヲ捲テ」「公卿ノ座トス」

「丑刻許ニ將軍已ニ參内アリ、其行妝見物ノ貴賤皆目ヲ驚カセリ」

「講誦十返許ニ及シカバ、日已ニ内樋ニ耀ク程也」

「翌日午刻許ニ人々被ニ退出一シカバ、目出ナンド云フ許ナシ」

諫言を無規して中殿御会は遂行されたが「サルニ合セテ」「同三月廿八日丑刻ニ」天変東へ飛行。

「翌日廿九日申刻ニ、天龍寺新造ノ大虞、土木ノ功未レ終」先火炎上。「不思議ノ表示」と思われた。

天龍寺炎上についての「問答ニ時遷テ、御參内モ夜深過ル程ニナリ、御遊モ翌日ニ及ビケルトカヤ」

「角テハ天下モ如何ント危ブメル處ニ、今年ノ春ノ比ヨリ、鎌倉左馬頭基氏、聊不例ノ事有」

足利基氏逝去。

「同六月十八日、園城寺ノ衆徒蜂起シテ、公武ニ致ニ列訴一事アリ」

Osaka Shoin Women's University Repository

477		8月18日	最勝講。所作の人数から園城寺（三井寺）は除かれ、興福寺・東大寺・延暦寺より選出。
477		（？）	「南都・北嶺ノ衆徒等、於二南庭一不慮ニ喧嘩ヲ引出シテ、數々ノ合戦ニゾ及ケル」（他記録19日―私注）。
478		9月下旬	「同九月下旬ノ比ヨリ、征夷將軍義詮身心例ナラズシテ、寝食不レ快」（10月頃から病気だったらしい）。
479		12月7日	足利義詮「同十二月七日子刻ニ、御年三十八ニテ忽ニ薨逝シ給ニケリ」
479		同 12日	「等持院ニ奉レ遷、同十二日午刻ニ、荼毘ノ規則ヲ調テ、佛事ノ次第嚴重也」
479	今年		「今年ハ何ナル年ナレバ、京都ト鎌倉ト相同ク、柳營ノ連枝忽ニ同根空ク枯給ヒヌ」
479		（？）	細川頼之が四国より上京、執事職となって、幼君義満を輔佐する（9月7日讃岐より上洛）。

〈注〉

1 『太平記』（日本古典文学大系34・35・36）のうち、本稿では、大系36の巻33から最終巻の巻40までをとりあげた。

2 本文の引用を除き、巻数、頁数、年・月・日ともに算用数字を使用した。

3 「記事」欄のうち、本文を引用した場合は「 」をつけ、人名・年月日等についての補記と、大系本の頭注・補注に注記がある場合（史実とのズレなど）のみ、（ ）内に要約して記したが、二、三箇所私注を付した。

4 前稿（『樟蔭国文学』第十八号・第十九号・第二十号）同様、故事引用の文中に出てくる年号（巻三十四・二七七頁の「建久」、二九〇頁の「應和1年ノ末」、二九一頁の「天慶」「承平」、巻三十五・三一八頁の「承平四年八月一日」、三一九頁の「承久」「貞應」「貞永」、三二一頁の「寛喜元年」、三二九頁の「天寶十三年」、巻四十・四六九頁の「天喜四年三月」等）は省いた。

（昭和58年5月7日稿）